

留岡幸助と非行問題

住 谷 磐

(1)

留岡幸助は、いまでいう非行問題を社会科学的に考察し、その対応策に生涯をかけて実践し、献身したわが国最初の先覚者である。非行という青少年の反社会的非社会的な行動は洋の東西を問わない社会問題であって、その様相は時代を反映し、社会悪・人間悪を象徴している。青少年の犯罪についても社会のうけとめ方や理解はさまざまであり、対応の仕方も変化してきているが、今日では青少年の犯罪を非行として成人の犯罪と区別し、刑法の対象とみずに少年法という教育主義を基調にした特別の法を制定して、非行少年の健全育成にあたるという新しい法体系と新しい社会ルールが設定されている。その結果、非行の防止、非行の治療、非行少年の社会復帰について教育分野、家庭面、社会的施策に多大な注意と努力がはられるようになっていく。この近代社会の非行問題について、わが国で最初にこの問題の重要性を認識し、問題の科学的な解明と治療と教育の体系を創造したのが留岡幸助である。彼の理論と実践は近代日本の社会における非行問題についての金字塔ともいえる輝ける功績であって、それは今日の非行対策の水準も遠くおよばないほどの秀れた理論的実践的水準を示している。その点、留岡幸助は過去の人ではなく、この分野においては今日の人であり、また、将来の指標として仰ぎ、学ぶ多くの課題を提出しているのである。

応々にして、明治・大正の社会的施策は古く、過去のものとして顧みられない傾向があるが、留岡幸助の業績は時代の変遷にもかかわらず新鮮であり、予見的であり、問題の本質をつき、問題解決のさまざまな可能性を示唆している。勿論、戦後における犯罪学や非行問題についての研究、心理学・社会学・社会福祉の進歩発展は顕著なものであるが、少なくとも非行問題に関するかぎり、彼の理論的実践的筋道と指針は時代的制約にかかわらず卓抜しており、今日の水準をはるかに凌駕している。それは精神面、技術的対応、処遇上の日常的な指導、教育面、さらに、非行少年の生活環境、集団生活の運営上の諸問題に至るまで、留岡幸助の壮大な理想と構想は世界的にみても、その類をみないほど遠大で高遠なものといえる、

今日、彼の偉業は北海道家庭学校として谷昌恒校長のもとに引きつがれているが、当初、この学校の規模は一千町歩であり、今日の規模の倍以上の宏大な自然環境を有していた。しかも、この美しく雄大な自然のなかで百五〇名の非行少年を教育しようというのであるから、それだけでも今日では到底考えられないことであろう。北海道庁が、これだけの土地を留岡幸助個人の事業のために払下げを行うにあたっては、もちろん困難な経緯があったが、大正三年八月、この家庭学校は創設の第一歩をふみだすのである。この宏大な土地は未開の原野と山林であり、交通不便な僻地そのものであった。ときに彼は満五〇歳であった。当時、留岡幸助の名は全国的に有名であり、いわば功成り、名とげて、人生五〇年といわれた当時にあつて、現役的な苦勞から一步退いてもよい時期でもあったが、彼は自己の理想実現のために若々しい覇氣と情熱に燃えて勇躍として北海道家庭学校建設に献身するのである。自から鍬と鎌を持ち、やぶ蚊とたたかい、藪を切り開き、木の根を掘り起し、道をつけ、丸太小屋を建て、宏大な原生林のなかに非行少年とともに肉体労働に従事し、汗を流し、手にまめをつくりながら着実に彼独自の教育環境を切り開いていくので

ある。それは、まさに苦難な棘の道であった。いまでこそ、北海道は若人たちの憧れの土地になっている。美しい自然と雄大な景観は現代の過密化した都市環境とは全くちがった自然を感じさせる。しかし、当時の北海道はまだまだ不便な自然のきびしさばかりが支配する僻地であった。とくに、家庭学校が建設されている遠軽の地は札幌からも室蘭からも遥かに離れている北辺の地である。交通の便が極度に進んだ今日でさえ、遠軽は遥かに遠き土地であることに変わりはない。しかし、留岡は、この地を自らの理想の地と定め、近き地として労苦をいとわず、距離を感じず、非行問題解決の唯一の場所として開拓と建設に情熱を燃やすのである。

当時にしても、また、今日においても、この非凡で卓越した構想は、常人のおよびつかぬことである。留岡が明治二四年五月、北海道空知集治監の教誨師として赴くときも恩師ベリー以外、誰一人として賛成する者がなかったが、北海道家庭学校の創設についても同様に、この偉業に積極的な賛同者はなかった。北辺の僻地に非行少年のための施設を建設する壮大な計画は、留岡をめぐる人々にとって疑心暗鬼であり、誇大妄想的な企てのように思えたのである。しかし、留岡にとっては、北海道家庭学校の建設は偶然なひらめきでも思いつきでもなかった。明治三二年一月、巣鴨家庭学校の創設当初より、北海道の地に新しい家庭学校を建設する計画を心に秘めてから、いわば長年にわたる念願を非行に移したにすぎないものであった。それも、巣鴨家庭学校における一五年間の実績をふまえ、その一五年間を非行問題研究と教育の試験期間として、その成功に確信をもって、これから本格的に事業を実践するというのであるから、北海道家庭学校は彼にとって、非行問題にとりくむ長期の生涯的な計画の実現にはかならなかったものである。人生五〇にして、それまでの地位・名誉・仕事のすべてを投げ捨てて一路白頭に至るまで若き情熱をもってうち込んだ非行問題こそは、まさに、彼にとって生命の燃焼そのものであり、愛に生き、神とともに生きた彼の生き

甲斐であり、天命でもあった。そして、この一途なとり組みは果嶋の家庭学校の創設より、さらに遡り、明治二四年の空知集治監教誨師時代に端を発して、脈々として彼の魂をとらえ、彼の信仰、教育観、人間観、社会観のすべてにわたる広汎な価値体系は終局的に非行問題に集中し、彼の社会活動の出発点となり、また、終着点となった。

留岡幸助の非行問題にたいする一貫したこのとり組みは先駆的、開拓的で、まさに、明治中期から大正にかけて稀有な近代社会事業の展開となったが、彼が非行問題にとり組む背景には、さらに大きな使命感があった。それは、「この世から犯罪をなくする」という人間愛に根ざした理想であり、基督者として神の御国をきたらすという深い信仰に基づく犯罪防遏の思想であった。この理想と思想は、彼が明治一八年、同志社英学校に入学して以来、新島襄をはじめ、デヴィス、ラーネッド、ゴルドン、グリーンなど、秀れた学者・宣教師によって培われ、社会の闇黒面に光をかかげる基督者として生涯を捧げる使命感の結晶であり、終生変らぬ信条となったのである。彼の非行問題への認識は、この「犯罪をなくする」という理想と思想の延長線上に生起した課題であり、「犯罪をなくする」ための布石の意味をもつものであった。

彼は同志社時代に学んだ学殖と使命感につき動かされて、丹波教会の牧師の職をなげうって空知集治監の教誨師となり、社会の闇黒面の一灯となる。この牧師から教誨師への転機が、彼にとって最初の非行問題への開眼へとつながるのである。この空知集治監の教誨師としての仕事は、彼にとって始めての、厳しく試練に富んだものであった。当時の北海道監獄の状況は小池喜孝著の『鎖塚』（一九七三年）に述べられてあるが、当時の内地の重罪人は北海道送りとなり、対露戦略の北辺防衛のための道路開拓の肉体労働に従事させられ、食糧事情も悪く、囚人の多くは水腫症で死亡したという。これは第二次大戦中、多くの日本人が経験した栄養失調という症状と同じものである。囚人の汗と

涙で開拓された道路を、北海道ではいまでも囚人道路と称しているが、勸善懲惡の報復刑主義のもとに酷使された囚人は、厳しい自然のなかで肉体を使い果して死んでいった。罪と人間を峻別する基督教の立場に立つ留岡幸助は、この監獄の実情をみて監獄改良の意欲を燃え上がらせ、日本の刑罰主義の法体系に反旗を翻すようになる。彼の監獄改良と勸善懲惡思想の批判に理論的根拠を与えたものは、恩師ゴールドルから送られたイー・シー・ワインス著の『文明国に於ける監獄及救児事業』という大著であった。彼はこの英文の大著を砂地が水を吸い取るように全身全霊をもって熟読玩味し、生涯変らぬ監獄改良の権化となり、犯罪についての不定刑期主義の考え方、出獄人保護の重視、青少年犯罪についての対応などについての思想的基盤を確立したのである。日々の教誨師としての仕事のなかで感じていた疑問や怒りが、この著書を読むことによって氷解し、新しい光明と展望を与えられた。そして、明治二十七年五月のアメリカ留学への契機ともなった。

とくに、彼の教誨で注目すべき点は、総囚教誨とともに個人にたいする密室（房）教誨を重視したことであろう。彼は囚人の個人性を尊重し、個室における個人面談を行ない、犯罪を起す経緯を詳細に聴きとり、家族関係、家庭環境を調査探究している。これは今日の「ケースワーク」における生育歴・生活歴の調査と同じである。彼は三百ケースにのぼる個人面談のなかから犯罪を起す共通の要素として、幼時から青少年期にわたり、家族問題、家庭環境の悪さ（夫婦不和、遺棄、家出、暴力、飲酒、浪費、賭博など）が存在することを痛感するのである。この社会から「犯罪をなくす」ためには、まず、児童期から青年期における家庭環境を良くしなければならないという家庭教育、社会教育の重要性を認識する。ここに、留岡幸助の教育者としての視野が開け、ルソーの自然主義教育、ペスタロッチの教育思想、フレーベルの幼児教育観などが終生変らぬ彼の教育思想として体系づけられることになる。彼にとって、この基

督教の近代的教育思想は非行少年を教化する実践的な指針となり、技術となって日常生活のなかに具現化されるのである。

彼は、この空知集治監時代の体験を多くの著作のなかで述べているが、巢鴨家庭学校を紹介した冊子『家庭学校』（明治三四年六月一六日、警醒社書店）第二章「家庭学校の歴史及び概則」のなかに「爾来四星霜、重罪囚最も多き北海道空知集治監に於て（当時の罪囚概ね二千人なりき）、或は縁囚を集めて教誨し、或は個人に面晤して親しく犯罪の原因を研究したり。而して彼等が殆んど挽回する能はざるほどの犯罪を為すに至れる原因の多くは、十二、三歳より十八、九歳までの間に於て教育感化其宜しきを得ず、之が為め遂に習慣犯者と悪化するに至れり。此の事実を知ると同時に、余は監獄の改良と共に不良少年の教育一日も忽せにす可らざるを感じ。茲に於てか感化事業を独仏英米に研究し、身親しく米國に渡りて監獄事業と共に慈善及び不良少年感化事業を取調べたり。」（『留岡幸助著作集』——以下『著作集』と略す——第一卷五七六～五七七ページ）と述べている。この四年間の教誨師としての生活体験と渡米生活一年半にわたるマサチューセッツ州コンコルド監獄における研修は若き幸助の血となり肉となって将来の偉業を決定づけるものとなる。とくに渡米後、入手したりチャード・デキソンの著『ジョン・ハワード及欧州監獄界』"John Howard and the Prison World of Europe"との出会いは、彼に監獄問題の世界史的視野を与え、監獄改良の苦難な道に立向う勇氣と決意を固めさせた。留岡は日本の監獄事情、アメリカの監獄状況、さらに、留学の帰途、ヨーロッパ諸國の監獄を視察することによって、自からの体験と経験をもって理論を構築し、自からの理論を實踐し、実証することに生涯をかけるようになったのである。留学の帰國後、明治三〇年六月、靈南坂教会の牧師に就任し、『基督教新聞』の編集を担当することになり、毎週、この新聞の社説、隨想に健筆を振うことになるが、留岡はこの紙面にはあ

くまで信仰上の問題を中心としてのテーマを設定し、自己の心に鬱勃としている監獄改良問題、感化事業問題などの専門的な課題は極力ひかえている。この態度にも、留岡の幅広い教養と学識と良識をうかがい知ることができるが、彼の犯罪関係の論文はもっぱらその専門誌『監獄雑誌』に掲載し、空知時代から専門誌『獄事叢書』にも論文を寄せている。彼の最初の非行問題に関する論文として注目されるのは明治二五年七月二〇日発行の『大日本監獄雑誌』五〇号にみられる「罪囚果して感化し能はざる乎」という空知時代に書かれた小論である。文中、彼は「人の性や元と善なり誰か初より好みて罪惡をなす者あらんや、彼が本善の性遂に凶惡に化するまでは種々の原由と歲月とを経過せざる可らず、家庭に於て両親を喪ひ、寄る辺なき身となりて諸國に流浪し竟に惡境遇に陥るあり、惡友の誘惑遂に生れ得ざる罪人となるあり、家庭及び國家の無教育は遂に人をして凶惡無頼ならしむるあり、如斯、罪囚なるものを研究し来る時は吾人は彼等の罪惡を責罰し憤怒すると共に、又一方には涕を以て如斯墮落し來りたる所以を察して深く憐まざる可らず、感染の病には藥餌あり治術あり以て癒すを得べし、罪惡なるものは心の疾病なり感染したる疾病争か癒し得ざるの理あらんや」と述べている（『著作集』第一卷一三～一四ページ）。この熱情溢れる文意のなかに、すでに留岡の終生追求して止まない青少年感化教育の方向と犯罪の根源を社会環境に求め、教育刑、不定期刑論の萌芽を知ることができる。この所論は犯罪の未然防止につながる思想が溢れており、「家庭及び國家」という表現のなかに彼が國家を従とし、家庭を主とした家庭教育主義の人間觀が示されている。

さらに、同年の『監獄学雑誌』（三卷二三号）には出獄人保護事業の重要性を論じて「罪囚感化」（前掲書所収）という小論がみられる。留岡は終始、犯罪の前後を重視し、犯罪の予防と犯罪後の保護の問題を社会の緊急課題として論究するとともに、自からこの問題を実践的にとり組んだのである。彼の家庭学校創設は犯罪の予防策として世に示し

たものである。彼にとって青少年の犯罪は犯罪とみず、将来犯罪を起こすであろう要因と考え、未然に犯罪を防止するための再教育の機会をつくり、家庭的教育によって健全な人間となるよう自から奮起する「場」の重要性を考えたのである。その「場」の施設として、明治三二年一月、巢鴨に家庭学校が創設されるのであるが、しかし、それまでの道程は長く、険しいものであった。それは滞米留学中より寄せられている『監獄雜誌』『獄事叢書』にみられる多くの犯罪論、不定刑期論の論文、論争によって知ることができる。留岡の監獄改良への提言や不定刑期論は渡米中の論文がすでに専門分野で認められ、法学界においても監獄問題や感化事業に関する専門の理論家として確固たる位置を占めるに至っていた。

とくに家庭学校設立への展望を意味する著作として、明治三〇年一月、警醒社書店から刊行された『感化事業之発達』をみる事ができる。この書の総論「感化事業の精神と其方法」において救児事業を定義づけている。それは「救児事業とは何ぞや、読んで文字の如く、初めて母の胎内を出でたる赤子より、長じて十七、八歳に至る、まだ人間の嫩葉ともいふべき児童を救治保護する事業を謂ふ」として、「然らば何をか救護を享くべき位置という、他なし第一、両親を喪ひたる孤児、第二、父母ありと雖も放逸にして常に其膝下に在らざる浮浪少年、第三、父母相当の教育を施さんと欲すれども両親の支配を受くるを肯んぜず、たとひ父母あるも教訓宜しきを得ずして天下の公法に触るるもの、又は法律の罪人とまで墮落せざるも将来危険の行爲あるもの、第四、瘋癲白痴、第五、私生児にして公然教育を施す能はず他人の門戸に放棄せられ、若くは極貧にして到底養育し能はざる棄児、即ち是等の種類に属する小児に^{ことごと}く我救児事業の恩恵を受けざるべからざるものたり、吾人は此の如き小児に對し、人道の精神を以て須らく救護の策を講ぜざるべからず。」と述べている（『著作集』第一卷一六三ページ）。この著書は青少年の感化教育論として特

筆すべき先驅的役割を果たした。「少年を感化するには必ずしも高尚なる教育を用いるを要せず、至極平易なる、即ち自然の産物を利用して大問題たる人生といふことを教へざるべからず、但し労作のみに偏するは却て宜しからず、半ば教育し、半ば労働して能く其中庸を取らざるべからざるなり。」「健全の身体には健全なる思想あり、体育は小学校に必要なが如く、感化院の少年にも亦肝要なり、体育の方法に二あり、一は普通体操にして、二は兵式体操、而して二者共に従順、規律、迅速及克己を教ゆる所以にして、悪少年の特質たる頭脳及神経の不發育を矯正し、併せて院児の音声を強め読書を好愛するに至らしむものなれば、特に感化院に於て必要なりとす。」と、その指導方針の所論を展開している(同一六九ページ)。また、感化院のわが国のあり方として、「家族制度を用いるを以て最上の策とす、仮りに三百の少年入院するとせば、一家族凡そ三十人として之を十家族に別ち、忠実温厚なる家族長、族母、補助族母、教師を置き、各家族独立の生活をなし、院児をして道德の実践を旨とせしめ且出来得る限り和氣靄然たる家庭中に教育し、教師の実行一に生徒の模範たるを得るに於ては、蓋し其成功期せずして至らんのみ」といっている(同一七〇ページ)。

この著書は当時の留岡の感化事業にたいする理論的な集大成であるとともに、家庭学校創設についての理論的裏付けであり、その教育理念と対象規定、運営方針まで明らかにしたものである。しかし、この書が刊行される頃は、まだ、巢鴨家庭学校の具体的な計画はなかった。

(2)

巢鴨の家庭学校が創設されたのは、明治三十二年一月二三日である。留岡幸助が社会事業家として一般に広く知ら

れるようになったのは家庭学校の創設者、そして、その校長としてである。それまでは、彼は牧師であり、教師であり、警察監獄学校の教授であった。彼はこれらの仕事を通じて慈善事業を論じ、監獄問題や犯罪について多くの論文を発表していた。有名な名著『慈善問題』（明治三年一〇月三〇日、警醒社書店）は、『監獄雑誌』や『基督教新聞』など数種の雑誌に掲載していた論文を集めて編集したものである。留岡の三〇数冊にのぼる著書の多くは、彼が日々刻々、書き綴り、『人道』や『斯民』、その他の雑誌に掲載した論文を問題に応じて編纂したものである。彼の著述活動は多忙な実践活動のなかから生れており、目と耳と足で確められたものであり、それだけに実証的で説得性のあるものといえよう。しかし、家庭学校の創設は彼にとって始めての施設建設であり、理論を実践に移す最初の実験と体験であった。長年の念願と希望が実現する期待と情熱が家庭学校にそがれるのであるが、反面、当初から苦勞や不安が大きかったにちがいないのである。

彼は「家庭学校設立趣旨書」を『監獄協会雑誌』五号（明治三年一月二〇日）に掲載している。この趣旨書が何時頃に書かれたものか不明であるが、少なくともこの発行日の一カ月前には書かれたものと思われる。文末の日付と住所は明治三二年一月で、巢鴨の家庭学校の所在地と家庭学校校長の肩書がついている。この「趣旨書」は短文ではあるが、留岡の当時の犯罪問題にたいする批判的立場、海外の動向と感化事業の必要性が適確に、かつ、熱烈に述べられている。「世多くは不良少年を改善するの難きを嘆息するものありと雖、是れ必竟局外者の皮相觀察のみ。不良少年の多くは悪むべきものにあらずして寧ろ憐むべきものなり。彼等の多くは、幼にして父母を失ひ四方に流浪し、仮令父母ありと雖も其家庭紊乱して秩序なく、実に罪惡の練習所と異ならず。彼等は実に知らず識らずの間に不善の境遇に陥るを免れず。必竟彼等に不良の傾向あるは全く之が為なり、或は天災地変に遇ひ、一家離散衣食に欠き、或

は流離顛沛に際し道路に彷徨し、往々悪化せらるるものあり。是れ豈独り其人の罪のみならんや。抑も亦境遇の不良なるが為なり。是を以て彼等をして純良正直の人たらしめんと欲せば、彼等の境遇を一転し、之をして善良なる家庭の裡に置かざる可らず。他無し、境遇の順逆如何は、即ち彼等に取りて死活如何の問題たればなり。」と論じている

〔著作集〕第一卷五三二ページ。

この一節は留岡の非行観、人間観、社会観を短く、適切に述べたものである。非行の本質は、今日でも、この短い留岡の論旨と変りはない。社会は高度化し、複雑になり、緻密になっていくが、非行の本質は留岡が端的に指摘した通りのものである。しかし、当時の社会は青少年の不良行為にたいしては厳しく、理解はなかった。不良少年の群は社会の除け者であり、犯罪予備軍としてきらわれ、抹殺すべき対象とさえ一般に思われていた。この一般状況のなかで、留岡の感化教育の主張は容易に理解されず、家庭学校の歩みもまた遅々たるものであった。

国の施策としては、この当時、漸く青少年の犯罪問題に注目し、その更生のために「感化法」を明治三十三年四月、第一四議会で成立させるが、非行問題については無理解な内容のものである。留岡は早速、この感化法案について『社会』二卷一三三号（明治三十三年四月二〇日）に「感化事業に就て」という論文を発表している。この論文は第一節で公私の慈善事業を比較対照し、その長短を論じており、第二節で不良少年感化事業を論じ、感化法と感化院のあり方を痛烈に批判している。この論旨は非常に先進的開明的な内容である。「余輩は感化事業を以て純然たる教育事業なりと信ずる者なり。此故に警察署、裁判所、委員会、監獄局等の何れにも属せしむべき性質のものに非ずと認めざるを得ず。然らば何れか最も適当なりやと問はゞ、余輩は之を視学官の監督下に置くべしと答へんとす。」と断言している。今日でいえば非行問題はすべて文部省の教育下におくべしというのである。まことに予見的達観である。「世人

をして感化院に入るは恰も監獄に入ると同一の感を起さしむる如きは、将来斯業の爲めに注意すべきことなり。」「余輩は全然之を教育機関内に入るゝの至当なるを信じ、且つ其性質に適して成効し易きを信ずる者なり」といつている（『著作集』第一卷五四二ページ）。日本の教育界が留岡の考えを正しく理解し、非行問題について教育の主要課題として対応しておれば、今日みられる成績偏重の弊害は起こりえなかつたであらう。この論旨にもとづき、留岡は第三節で「家庭学校の主義と性質」を論じている。家庭学校は純然たる感化学校であるが、世の中の人々は感化院を監獄と同一視しており、現に感化院の状況をみると外囲を高い板塀をめぐらし、懲罰法も亦監獄内に於ける観があるので、「感化院の名称其物は已に教育的に非るが如し」、「之れ殊更に家庭学校と命名せし所以なり。」といつている（同上）。留岡は、その当時であつて今日の状況から考えてもすでに一步も二歩も、社会の前に出ているのである。家庭学校には社会とへだてる塀はなく、物理的にも精神的にも社会と自由に往来できる教育機関として位置づけされた。今日の北海道家庭学校にも正門の門柱が二本建っているだけで、塀や柵は存在しない。

非行問題は留岡が主張するように、明らかに教育問題であり、非行は純然たる教育の課題として対応すべきものであるが、犯罪についての偏見があまりにも強いために、今日でも非行は教育の分野から除外されている。非行をもつ青少年は教育機関から追放されることは依然として跡をたたない。非行を正行に戻し、正否、善悪の道理を教えるのが教育の一つの重要な機能とするならば、「退学」とか「放校」という罰則は教育の本質に反するものといわねばならない。同志社は設立当初から無処罰主義の立場に立つ教育機関であつた。留岡も終生、この同志社の無処罰主義の教育理念を貫き通したのである。留岡は「蓋し悪化少年の逃走を防遏する手段として堅牢の牆壁を築かんより、寧ろ逃走するの念を起さしめざるこそ肝要なれ。故に特に他に倣ふて高き板塀を廻らすが如き策に出でず、感化則ち真個

の教育こそ牆壁なりと信じるものなり。」という(同上)。彼は犯罪より人間を重んじ、犯罪の性行より、人間の再生の努力を信じている。彼は教育の要素として五つ挙げている。一、基督教、二、普通教育、三、実業(農業を主とす)、四、体育、五、音楽である。この五つの方法を以って教育する方針としている。それから四つの主義として、一、勤勉、二、独立、三、正直、四、清潔をあげている。そして、「凡そ主義の名目は可なりとするも、之を活動せしむる者なくんば、有名無実に終るべし。此故に先づ主義をして活動せしむるものに、活ける信仰を要す。余輩の宗教を入れたるは之に拠るものなり。」と宗教の重要性を教育の前提に据えている。留岡にとって、基督教は生命の泉であり、教育の仕法であつた。そして、彼は「家庭学校なるの故を以て、同一個所に起臥せしむることをせず。将来九十人を収容すれば十五人宛を一軒に住居せしむ、則ち茲に六軒を造るの要あり。已に六家あれば斯に社会を為すが故に、相互の義務あり、独立の生活を為すと同時に、家族と社会に対する義務を解せしむるに力むべし。而して他日實際社会に入るの準備此間に成るを信ず」といつている。彼はこのときは一五人単位の小舎制をとり、家族的な秩序と家庭的な雰囲気をつくり、非行少年にたいする新しい教育機関を創造しようとしたのである。教育法としては「毎日午前半日を教育の時間とす。尋常、高等小学校及中学の別あり。午後は器械、兵式体操を為し、一日少なくとも三時間乃至四時間は田圃に出で、農業に従はしめ、夜に入りては軍歌唱歌並に讚美歌を唱せしむ。学校、教師、生徒は各分業して責任を重んぜしめ、樹木、田圃の中にも互に分担ありて之を監督せしめ、田圃より得たる所の収入は応分に配当するの組織と為す。斯の如くして大凡不良少年の感化を為し得べしと信ずるなり。」と述べている(同書五四三ページ)。

この論文は家庭学校が創設されて約三、四カ月後に書かれたものである。この当時、家庭学校は一棟の学舎と教師三名、生徒四名の状態であつた。しかし、家庭学校は敷地三千五百余坪あり、林と田圃が広がる閑静で眺望のよい自

然に恵まれていた。少くとも留岡は、この恵まれた環境を最大限に利用して、当初は九〇名の少年たちを教育することを目的にしていたにちがいない。一五名単位の家庭的・小集団を中心として、一般的な普通教育を年齢別能力別の学級に分けて行い、実業教育と体育、音楽を充分に生活のなかにとり入れようとしている。そして、彼はこの教育方針を着実に発展させていったのである。

明治三四年六月、家庭学校の創立後一年半にして、留岡は『家庭学校』(“The Family School”)という小冊を警醒社書店より出版している(『著作集』第一巻五七二ページ以下参照)。この書は教育学史のうえからも、また、非行問題の専門的な研究のうえからも非常に大きな価値をもつ内容である。全体は十九章から構成されているが、一年有半にして、留岡がいかにこの感化教育の現場に真剣にとり組み、非行問題の本質を分析し、解釈していたかがわかる。家庭学校の全貌を知るには必読のものであるが、留岡も天下に自分の畢生の事業を知らせ理解してもらうために心血を注いで書いたものにちがいない。それほどに各章ともに要をえて豊かな内容をもっている。英文まで附してあるところをみれば、まさに海外にまで家庭学校の全容を紹介しようとする気概がうかがわれる。英文には“First Annual Report”というサブ・タイトルがついている。

第一章から第八章までは感化事業の歴史や本質を論じたものであるが、第九章からは実際に非行少年と生活をとみにし、自から指導・観察した問題点が分析されている。第九章は不良少年の性癖を(い)から(る)までの十一類型に分け、虚言、盗癖、粗暴、家出、浪費、反抗、言葉使いの悪さ、怠惰、不安定、破壊的、空想癖など、それぞれの特徴をあげている。とくに注目されるのは非行少年の感情的な成熟度を重視している点である。「不良少年が其年齢の割合に早熟せると、未熟なるとは、諸種の不良行為を顕はす所の重なる原因と謂はざる可らず」として、各少年の成熟度に

相應する指導の必要を強調している。そして、監督のむずかしい類型、容易な類型、監督の不必要な類型をあげている。

この当時、収容児童は一名で、四〇坪の一棟の学舎しかなかった。留岡が家庭学校を開設したことが世間に知れるとともに依頼したいという希望者が相次いだのであるが、家庭学校はまさにゼロから出発しており、「目下、校内に現存する家屋は校長室、教師夫婦の宅、並に昨年三月竣工せし第一家族の三棟なり」という状況であり、収容児童数を予定して学舎を建設して開校したわけではない。したがって、入校希望者があつたとしてもそれにすぐ応じることはできなかった。第十九章に「家庭学校の将来」として理想像を述べているが、それには、先の九〇名という児童数から「六〇人を容るゝを理想数とす。」と人数の訂正がみられる。そして、五棟を増設し、六家族とし、一家族ごとに一〇人の生徒をあてている。それに、礼拝堂と教場と二棟の工作場、それに体操場の建設を描いている。以上が、当時の家庭学校の物理的な理想的規模である。

しかし、ここにも今日、考えさせられる多くの問題がある。留岡は児童の教育に教師夫婦一組と一〇名の子どもたちを理想をしたのである。それに全体の児童数も六〇名におさえた。しかも「更に進んで出来得べくんば一万坪の土地を購入し、大いに農業を奨励せんとす。」としている。そして、最後に「最も天然の勢力に富む北海道に植民家庭学校を設立して、農業、牧畜、家禽等の飼育を為し、二百若くは三百の生徒を収容するを適當と考ふ」として、北海道へ家庭学校を建設しようとする抱負を述べている。「苟も我国の将来に於て大いに感化事業を成功せしめんと欲せば、北海道は最も適當の他なりと謂はざる可からず。」「不良少年の感化事業は到底東京の如き人家稠密なる場所に於て実行し得可らず。」「文明愈よ進歩すると共に犯罪者、貧民、若くは不良少年等また文明の中心たる都会に集合する

は、之を欧米各国の大都府に徴して明かな事実とす。」と論じ、米國留学当時から「東京、大阪等に於て拾い集めたる窮児及び悪少年は之を北海の原野に於て改善せんことを期したり。」といっている。留岡の北海道家庭学校の構想は留学時代に各地の感化事業の実情を視察して、すでにその当時から心に強く秘められていたのである。いわば、北海道での感化教育事業は留岡の二〇年越しの念願であり、計画であった。留岡の北海道の美しい自然を愛する気持は児童を愛育する気持と合体して、美しい自然と人間の交感が児童の健全な心身の発達に無限の力を發揮することを確信していた。

北海道家庭学校のユニークさは留岡自身が世界にその類をみないというほど独創的なものであった。一千町歩余になる宏大な原野という自然環境はいうにおよばず、その運用について非行少年の教化と開拓農民による新しい村づくりと合体させ、それは物心ともども教育感化農村の形成を意図するものであった。一五〇戸の開拓農民を誘致し、家庭学校と農家を本家と分家の形態として農家の収入の一部を小作料として徴収せずにその金額相当を一戸当り一人の少年の養育費と考え、里親として少年の経済的な生活保障を行なっていくというものである。一五〇名の生徒と一五〇戸の開拓農家を結びつけ、本家として家庭学校においても農業、畜産を行い、農家にはそれぞれ平等に土地を分配し、独立自営農家として成長させ、地主と小作という封建的な収奪と支配関係を否定する反面、ここにおいても大型の家族制度を導入して、平等で自由な本家と分家として相互援助関係を確立しようというのである。留岡は自分の意図に合う農家を厳選して漸次、数を増していった。一千町歩にわたる土地利用と感化事業の見事な合体を計画的に実行したのである。石井十次も九州の茶臼原で児童の将来の転業として新しい「農村づくり」を実行したが、留岡は石井の構想をさらに発展させ、合理的教育的な内容をもつ全く新しい「農村づくり」を実践したのである。この経緯

と成果については留岡清男著の『教育農場五十年』（昭和三四年、岩波書店）という名著があるので、それにゆずるとして、留岡の卓抜な構想と長期計画、そして、行動的な実践力には余人の到底およびぬことを指摘しておきたい。なにしろ、大正三年当時の北海道はまだまだ未開な原野と山林が広がっていた。交通機関も未発達であり、学校開設当初、汽車はルベシペまでで、あとは山道一二里を歩いていく状態であった。冬は雪深く、開拓の仕事ができないので、留岡は大正三年以後は雪がとける五月頃から北海道に行き、十一月頃まで建設の作業を陣頭指揮し、雪の季節に東京に帰り、巢鴨の「家庭学校」の業務を中心に社会活動に東奔西走していた。茅ヶ崎に分校を創設したのは大正二年一月のことであるが、この分校は九月の関東大震災によって壊滅し、主任教母の神代スミ女史が殉職するという悲しい犠牲もでて、再建できないままになったが、北海道の構想はよき協力者をえて着々と開拓と事業が進展していった。

大正八年の『人道』一七三号に「感化事業二十年の回顧」という留岡の自からの事業を総括したような論文が掲載されている（『著作集』第三卷五三ページ以下参照）。留岡の著作は、この頃から回顧的な文章が多くなるが、この論文は留岡の感化事業にたいするとり組み方の最初から、その当時に至るまでの長い経過と、先駆者としての苦労が率直に述べられている。それは巢鴨家庭学校の敷地購入の経過から、当時建設中の北海道の分校への構想と期待まで、熱情溢れる報告になっている。

論文は一節から八節と結論によって構成されているが、自己の人生目的の大体八割近くまで達成したと思われるこの当時において、彼の透徹した非行問題にたいする理論的な整理が簡潔になされている。有名な三能主義という留岡の感化教育の三要素として知られている「勤労」と「飲食」と「睡眠」の問題も第三節の「身体の改造」のなかに位

置つけされているが、さらにおどろくべきことは、前述した留岡の最初の著書『感化事業之発達』のなかで述べられている教育方針が終始一貫して実践されていることである。事業を開始して二〇年間、非行少年の心身の発達不完全を改造する条件として食事、運動、体操、睡眠、沐浴、規律、清潔、洗濯、医療を挙げて論述している。このうち、とくに注目されるのは沐浴であり、それは温浴と水浴にわけ、温浴は週に三、四回、水浴は毎朝五時に起きて全員実行していた。水浴も二〇年間かかさず実行することによって感冒にかかるものもなく、身体を強健にし、勇猛の精神をつくる。彼は「曉明星を仰いで、地上霜柱の立つ中を浴衣一枚で浴場に駆け込むが如きは、実に勇氣のある者でなければ難しい」といっているが、留岡自身、病に倒れるまで毎朝の水浴をかかさなかった。彼は青年時代には病弱であつたが、水浴のおかげで頑健な身体になったと述懐している。今日の施設では到底考えられないことであろう。

さらに、留岡の専門的な開拓事業として注目されるのは社会事業従事者を養成したことである。家庭学校のなかに「慈善事業師範部」を設置して職員の養成に努めている。彼は社会事業を専門職として、その人材確保を第一に考えている。また、彼は今日のB・B・S運動と同じ性質のものを学校内の一つの教育機能として考え、優秀な苦学生を集め、「先生でもなし、生徒でもなし、時には夜学校を助け」、「生徒と遠足を共にし、校内遊戯を一所にし」感化教育を援助するような塾生を養成した。最初のあいだは事業の遊撃隊と称していたが、後には「思斉塾」と称して塾舎を建設するまでに至っている。

第八節に「三代事業」というテーマで、この事業は一代や二代では輿論を喚起することはできず、孫の代でなければ到底社会に認められないとしている。彼のこの予見はまことに正鵠を射たものであり、牧野虎二、今井晋太郎、今井謙と事業は継承されたが、實際上二代目的役割をもった留岡清男校長は大戦で荒廃した家庭学校を復興し、三代目

的な谷昌恒校長は今日この事業を継承発展させている。そして、社会もようやくこの非行問題を浮上させ、社会問題、教育問題として広くとり組むようになり、北海道家庭学校の歴史的な存在価値を認識するようになってきている。

(3)

留岡幸助の非行問題のとり組みは生涯を賭けたもので、この小論では論じつくされるものではないが、非行からの更生率が七〇%におよぶものといわれている。今日の一般的な更生率は五五%前後であり、非行の再犯防止がいかに難しいものか思い知らされるのである。現代社会は留岡の期待に反して家庭の機能が急速に衰微しつつある。家庭生活と非行が深い相関性をもつことは明らかである以上、非行発生の土壌はこれまた急速に広がっているといえよう。暴走族や集団万引や少女売春、麻薬遊びなど、現代社会を反映した新しい非行の形態がつぎつぎに出現している。留岡の洞察した非行問題の日本的な対応策は確かに基本的な方向を示している。しかし、非行問題にかぎらず、留岡が予見的に警鐘を鳴らした都市問題や教育問題、それに地域政策などは、まさに予見通りに物質文明の終末的な非人間的現象をつくりだしている。機械文明の潮流は人間の存在価値さえ消し去ろうとしているようである。留岡の非行問題に底流している人間愛の思想はまさに機械文明にたいする挑戦であった。彼は自然を尊重し、農業労働を生産活動や健全な人間労働の第一義と考え、都市への人口集中を批判し、実業教育を中心にして知育偏重をさけ、家庭生活の夫婦関係・親子関係の円満な愛情と雰囲気をいかにしてつくりだすかを論じ、豊かな情操と健康な身体の育成を基督教の信仰と教義によって論究して止まらなかった。

留岡には絶対主義的な天皇制の国家権力や資本の無制限な営利主義への政治的な抵抗や挑戦はみられなかったが、

社会の構成員が人間である以上、資本家も労働者も精神的宗教的な教育感化で不正や貧困や犯罪をなくすることができるという信念をもち、日本的な農村改良と健全な人間育成のために二宮尊徳の報徳思想をわがものにして、自からの生活すべてを感化教育事業に捧げたのである。「予が感化農場を建設せんとする動機」という大正三年四月の『新民』にみられる留岡の論文の初めに「感化事業の骨子」という小節があり、「骨子ともいふべきは独立自営の人間を造るといふにある」「苟くも働く事の出来る者には、老幼を問はず適当な仕事を授けなければならぬ」と述べている（『著作集』第三卷二九八ページ）。この論旨は感化事業にかぎらず、教育の基本的な原理であろう。これは、また新島襄の「良心を手腕に運用する人物」をつくる教育方針とも一致するものであった。

留岡幸助は明治・大正の時代において、客観的にみれば、高梁という山村の貧しい雑貨商の養子から日本を代表する社会事業家となった立志伝中の人物である。海外に留学することが二回あり、見聞学殖の広さと深さも彼の著作で示す通りである。しかし、それだけに明治・大正の社会的指導者にみられる特有のエリート意識も強く、今日の民主主義社会の価値観に矛盾するような思考や表現も随所にみられる。感化教育の指針や方法は卓抜なものではあったが、「国家的経済に注意する政治家及び社会改良家は先ず此の不健全なる分子即ち不良少年を北海の原野に送つて、植民的感化を实行するは甚だ策の得たるものなりと思惟す。」「吾人は医術に倣ひ、一たび身体の栄養の為に食したるものにて其の腸胃を害することあらんか、下剤を用ひて之を掃除するが如く不良少年、貧児、及び孤児は都会を乱す有害物なり、されば此の有害物を姑息的に尚ほ腹胃の中にて治療せんとするも其の効なからん」（『家庭学校』第一章の末尾）などという文章表現は明治三〇年代特有のものであり、今日の社会感覚とは大きな隔りがある。また、留岡は犯罪・非行について、たえず、国家経済との関係について論じている。留岡の国家観は一つの研究テーマでは

あるが、国家経済の無駄を排するために犯罪・非行をなくすることが必要であるという論旨が至るところにみられる。これも、明治時代の国家の隆盛を第一義にみた当時の思想を反映するものとして興味深いものがある。家庭を国家のうえに据えながら犯罪・非行問題を論ずるとき、国家の隆盛を願ひ、問題解明の対比に国の財政問題をもちだすところに留岡の理論的な矛盾と特長があり、同時に、明治・大正の時代を背景としたエリート層の特性をみることができる。

留岡は早くから監獄問題の理論家として頭角を現わし、海外の事情にも明るく、多くの専門的な論文を発表し、そのうえ、警察監獄学校の教授となり、その後、内務省の嘱託として地方改良の調査と、その指導者としての役割をもつて、全国を視察し、講演をして廻っている。当時の内務省嘱託という地位は知事に匹敵するほど高いものであった。彼は「治国平天下」という天下国家を論ずる気概をもっていた。「犯罪をなくする」という理想もこの天下国家を論ずる気概に通じるものである。キリスト者、牧師としても教会の中にとどまらず、キリスト教は実践の宗教と考え、社会救済の実践活動を教義として主張した。二宮尊徳の研究も報徳社の精神主義的な社会活動に強く共鳴した結果である。彼が学術的な理論家として健筆を振ったのは監獄改良と行刑についての分野であり、ついで、非行問題であった。非行問題を論ずるときは、すでに彼の社会的地位は高く、この分野の社会的指導者としての権威と評価が定まっていた。彼の発言は社会を動かすほどの力があつたのである。したがって、彼の文章には応々にして、その気負つた高踏的と思われるほどの強い表現がみられるのである。しかし、彼の偉大さは、ただ、強い自信に満ちた発言ばかりではなく、実際に理論を裏付ける実践を自から率先して実行したことであらう。自からの生活のなかに自からの理論を体现させていったところに留岡の社会事業家としての面目躍如たるものがある。刑余者が五人も六人も貧しい

留岡の家にころがり込むが、彼は狭く貧しいわが家に彼らを住み込ませて免囚保護の必要を世に訴えつづけるのである。非行問題についても彼の人生態度は終始変らず、自からの生活と非行少年の感化教育を一体化し、感化教育家としての生活と姿勢を貫き通している。非行についての彼の著作はすべて、この実践生活から生れており、単に専門書を読んでの理論や知識ではなかった。この理論が理論のみにとどまらず、生活の実践力として自から規範を示したところに、留岡の社会的発言力の強さと世論を引っばる強力なばかりの政治力が生じてきたのであろう。

それに彼の評論、随想にみられる自然や歴史や人間にたいする深い知識と愛情が彼の行動への魅力となり、多くの人々を引きつけたのである。この人間的な深い魅力がなければ北海道の千町歩にもおよぶ土地の払い下げはなかったといつてよい。彼は北海道の自然を絶賛し、北海道の将来を予言し、新しい村づくりと産業の開発に勤め、感化事業の成功とともに全国にたいして北海道の開発を宣伝したのである。北海道の家庭学校には千里の道もいとわず、大町桂月が訪ね、徳富蘇峯が訪れ、牧野英一が見学し、彼の事業を世に紹介している。

しかし、大正中期以降の日本ファシズムの嵐は留岡の理想と事業をつぎつぎに打ちくだいていったといつてよい。

明治天皇に深い愛情と尊敬をもっていた留岡は、大正・昭和と時代が移り変わり、絶対的な天皇制の軍国的支配のもとに社会は彼の意図に反して頹廢し、彼の人間教育観は無視される方向に進んだのである。関東大震災にたいする留岡の感想はとくに、彼の当時の気持を表現するものとして興味深い。彼はこの大震災を日本の腐敗した社会にたいする神の鉄鎚とみている。彼の意に反した世相にたいする神の怒りがこの災害をもたらしたといっている。関東大震災はまさにその当時の彼の社会にたいする怒りを自然と神が表明した事象としてうけとっている。彼にとっては犯罪、非行の原因を解明し、世に訴えつづけたにもかかわらず、北海道家庭学校建設以降の世情は犯罪と非行を助長してやま

ない方向に展開していったのである。大正三年以来の彼の社会評論はほとんどすべて、この世情にたいするきびしい批判に満ちている。この不満と怒りの蓄積の延長に関東大震災が出現した。それはまさに、留岡の信じている神の怒りであり、自然の社会にたいする鉄鎚であつたのであろう。それでも、なお、日本の社会は右翼化し、軍国主義化を強め、留岡の自然観、人間観は遠方へと追いやられ、なお、留岡の剛健な身体はこの彼の意図に反した趨勢を反映するかの様に病弱化し、倒れるのである。留岡は明治のよき近代文化の一翼を担い、近代社会事業という新しい文化を自から創造したのである。

しかも、彼が意図し、期待していた国家の歩みは彼を裏切り、彼の事業をふたたび北辺の遠きものにしてしまったということが出来る。彼が社会から「犯罪をなくし」「非行をなくして国の隆盛を願ったにもかかわらず、彼の愛する国家自体が皮肉にも犯罪国家として彼が学んだ欧米諸国から打ちくだかれる運命の道を歩むようになったのである。

戦後三〇年、わが国の社会福祉事業は大きく飛躍している。社会福祉の理論面、事業面においても欧米諸国の水準に達しようとしている。しかし、この時点で留岡幸助の業績を考察するとき、彼の理論と業績が今日の福祉全般の状況の基盤となり、方向づけになっていることを知るのである。そして、さらに、彼の実践的な活動は今日の水準をはるかに上廻り、高いものであつたことを認識するのである。それは、彼は世界的な基督者であり、人間として普遍的な深い信仰と人間愛に燃えた人物であつたからである、ということができよう。

しかし、留岡の思想と生涯を知るとき、戦後三〇数年を経た今日の状況は彼の求めて止まなかつた人間愛と家庭尊重の状況とは大きなへだたりがある。基督教の影響は次第に弱くなり、学校教育は知育偏重におち入り、家庭環境は都市・農村を問わず破壊されつつある。自然環境さえも産業開発の犠牲にされ公害をもたらすような状態になった。

都市は急速に過密し、留岡が明治の末年に都市が過密化していると警鐘を鳴らした頃とは較べものにならぬほどの過密度である。留岡は、大正の初期にイギリスのグラスゴー市を模範都市として田園都市計画を提案しているが、日本政府は都市計画を知らず、住宅政策の本質を理解せず、明治政府以来の富国強兵、殖産興業政策を中心に人間環境を視無しにつづけてきた。民主主義を標榜する戦後社会においてもこの姿勢は変わっていない。富国強兵を富国強労働に変え、殖産興業は大企業中心の産業育成となり、国民の人間的な生活環境については「住めば都」という貧しさに適応させる悪環境順応主義が依然として政治の本流となっている。

留岡は「国家」のうえに「家庭」を考えている。家庭は家族生活の空間を意味している。それは、物理的には居住空間であり、地域社会の生活条件全般にわたる問題である。彼は非行の発生原因の一つとしてこの家庭空間の大切なことを指摘している。今日の住宅条件、地域条件はどうであらうか。それは今更、論ずる必要がないほど住宅は狭小で、過密で、高家賃で、劣悪な状況が拡がっている。地域社会には車が氾濫し、歩道より車道が重視され、子どもは遊び場を失っている。留岡が明治の末期から大正の初期にかけて都市を慨嘆した状況とは較べものにならぬほどの悪環境が展開しているといつてよい。歴史は繰り返すというが、留岡が慨嘆する都市状況、社会状態にたいして大正一二年には関東大震災が勃発した。そして、今日においても、ふたたび同じ規模の地震発生が予測されている。人間の叡知の至らなさにたいして天災を神の怒りという留岡の発言に同意する意味ではないが、今日の人間環境を無視した大都市の状況を人為の力で変革が不可能なまぎり、天変地異の起り来りて変革の契機となってもそれは止むをえないというべきかも知れない。人間が人間として生きる家庭環境、社会環境の整備と創造は留岡が犯罪問題、非行問題の解明において明らかに指摘した通り、社会問題を解決する基本的な命題というべきであらう。今日の社会福祉が志向

している地域福祉の諸施策の原点ともいふべきものは、留岡が北海道に描いた自然と人間の交りのなかにみいだすことができる。そこには前述した通り、美しい自然が人間の成長におよぼす影響力、さらに、人間の健全な成育にかかすことのできない自然への第一次的な労働の尊さが論じられており、自然の法則と神の摂理が一体となって、人間の心と身体の成長に必要な健康と誠実と敬虔な態度をつくることが立証されている。社会福祉の諸施策は量質ともに高水準が求められるが、同時に人間としての豊かさと価値をもつ人間創造が実現しなければ意味はないのである。

最後に、留岡幸助は犯罪と非行の直接的な原因を家庭に見いだしたが、家庭問題を発生させる客観的な社会の仕組みについては説明しえなかった。彼はあくまで、主体的な人間の精神のなかに問題要因を探求しつづけた。彼は心理的な人間性の諸要因の相剋のなかに非行の発生をみたのである。この分析は今日も正しいことにはちがいないが、この思考によって彼は社会主義の道を歩まなかったといえる。同志社は基督教社会主義思想の潮流があった。彼はわが国社会主義の父ともいわれる安部磯雄とも親交があったが、社会主義の階級理論は容認しえなかった。留岡は階級理論は喧嘩の論理であるといって否定している。彼は階級相互の協調と協力を主張し、基督教倫理による隣人愛と信仰によって社会の調和と発展を考えたのである。彼の思想はマルキシズムの社会科学方法論とはちがっているが、いかなる社会体制においても、実存的な人間のあり方を考えるとき、彼の思想は不死鳥のように蘇るのではあるまいか。近代的な社会事業の原点は、単に原点にとどまらず、その精神は継承され、豊かに発展されねばならないであろう。